

焼肉もできる喫茶店

—愛は、「時間」に弄ばれる道化ではない—
W.S

ここは大学近くの喫茶店『シロクマ』。

「やあ、いらっしゃい、今日は全員勢揃いだね」

店主の白熊が尋ねる。

「はい、今日丁度全員試験が済んだので」

「ええな～湯川は涼しい顔して…俺なんぼ単位落としたやるか」

「そう言って十津川も全部パスしてんだろ、ハーヤダヤダ」

「せやかて工藤、今回はホンマに分からへんねやって」

「君達、卑下し合うのはあまり褒められた行為ではありませんよ」

「杉下、白熊さんの前と言ってやるな、気の毒だ」

「明智テメェこの野郎、変人のくせに良い子ちゃんぶってんじゃねーぞ」

「工藤、お前はもう少し口調を改める面接で出るぞ」

「2人ともあんまりじゃれてると湯川が全員の注文タワーパフェにしちゃうよ」

「そんなわけあるか」

「浅見君に未だに訂正を入れるのは君くらいなものですよ」

6人が繰り広げる会話に客達の注目が集まる。

「相変わらず元気そうで何よりだ、さて、ご注文は？」

「えーと、俺ら5人はいつもので、浅見は何パフェよ」

「焼肉パフェかマロンパフェの気分かな」

「何だ焼肉パフェって」

「焼肉パフェ…は無いからマロンパフェで良いかな？」

「大丈夫っス、じゃ俺らいつもの席お邪魔してていいスか？」

「オーケーすぐに持っていくよ、ご注文ありがとうございます」

白熊がそう言うと6人は慣れた足取りでテーブルへ向かった。



それぞれの注文が来てから数時間が経つ頃。

「珈琲が美味すぎて馬になった」

「湯川って頭良いのに頭悪いよな」

「工藤に言われるとなんか…」

「なんかってなんだよ！ってかもうすぐ4時じゃん、俺バイトあるからそろそろ…」

工藤が立ち上がるろうとした時、突然店内が真っ暗になり、水しぶきのようなものが降ってきた。

「うわっ停電か！？」

「雨？なにこれ？」

「工藤も浅見も落ち着け、多分ブレーカーが落ちただけだ、すぐに…」

バチッ ガタッ

「！？何だ今の音」

「工藤君の後ろの方で何か光ったように見えたが…」

「ホンマになにが起こっとんねん」

困惑する6人。再び明かりがついた瞬間、全員が目が釘付けになる。

隣のテーブルで、1人の男性が倒れていた。